

ストロベリードロップ、または檸檬をひとつち。NG集

・ストロベリードロップ、または檸檬をひとつち。

「やりましょう、ファーストキス」

ボールペンをくるくると弄るライカの手には、カンナはそっと自分の手を重ねた。

そこで、自分の指先がびっくりするほど冷えてることに気づく。しかし、ライカはそんなことは意にも介さず目を輝かせてカンナを見た。

「いいんでござえやすか？」

「……はい。ただし、キスはあまり人前で、かつ大人数とするものではありません。僕以外に提案するのは控えてください。」

「おお、そうなんでござえますね！わかりやした！拙は生憎キスを知りやせんので……カンナさま、どのようにすればいいか教えてつかあさい！」

「いえ、ライカさんはこちらを向くだけで大丈夫です。あと、口だけ閉じていてください」

「へ、へえ。それだけでいいんでござえやすか。閉じておきやすー」

口と一緒になぜか目も閉じたライカを見て、カンナの心臓はより一層うるさくなっていく。しかし、もやもやはいつのまにかふわふわとした熱に変わっていて、不快なものではなくなっていた。むしろ、初めて感じる熱に、浮かされるような心地だ。冷えた指先が小さく震えるのに、頬のあたりはうっとおしいほど熱く、

秒針の音が痛いほど耳に響く。それを懸命に無視しながら、カンナは椅子からわずかに腰を浮かせる。

「では、失礼しますね。ライカさん」

……ごち。

正面からキスをしようとしたカンナの眼鏡が、ライカの鼻にぶつかり、唇の少し前で顔が止まる。

……どうしよう。

眼鏡に邪魔されて失敗する、というのは割とファーストキスのお約束だったが、生憎カンナは、お約束がわかるほど恋愛小説を嗜んでおらず、さらに失敗をカバーできるほどの経験値も持ち合わせていなかった。

結果、冷や汗をたらりとかきながら固まってしまふ。

「……」

「これがキス、でございやすか？」

「……いえ。すみません」

ライカの問いかけで我に返り、カンナがさく震える指で眼鏡をとると、またライカがぎゅっと目と口を閉じる。

先ほどよりも、心臓は不思議と静かで。その一方で頬から耳の先にかけてが自分でわかるほど熱くて。どうか、その熱がバレませんように、と願いながらカンナは舐れるだけのキスをライカと交わした。

・レモンティーにミントを添えて。

「ね、ね、カンナさまも食べてみてつかあさい！」

「いや、ぼくは……」

「いいからいいから！……はい！どうぞ！」

遠慮しようとするカンナに、ライカはいちごをすくってずずいとかンナの口元に差し出してきた。その景色とライカの期待に満ちた表情に、カンナはどこかで読んだ恋愛小説の定番のシーンがフラッシュバックする。

これは所謂『あーん』では？

「カンナさま……もしかして、いちごが嫌いでやすか？」

「いえ……。そんなにおいしいなら、ライカさんが全て食べては？」

と

思って……」

「だめでやすー！」

半分本心、半分逃げでつぶやいた言葉は、勢いよく跳ねのけられて思わず小さく目を見開いた。ライカは少し怒ったような表情でさらにスプーンをカンナの方に寄せる。

「おいしいものを食べるのは幸せでやすけど……みんなで食べるのが一番おいしいんでやすー！エスプリの皆さんが拙に教えてくださーいやしー！」

だから、とさらに押されて、カンナは根負けして口を開いた。

ライカは慎重にカンナの口にいちごを運ぶが……。

「あ。」

べしゃり、とカンナの丸眼鏡の下弦に、ライカの持つパフェスプーンが激突する。クリームがたっぷりついたいちごももちろん眼鏡にべったりとついており、ライカの顔がサーッと青くなっている。

「わぁああ？！すいやせん！すいやせん！今拭きやすねー！」

「ちょ、ライカさん！大丈夫、大丈夫ですから！いたっ」

ぎゅうぎゅう、と眼鏡を顔にめり込ませんばかりに拭くライカをなんとか止めようとするが、カンナの方ではライカを退けることはできず、されるがままになってしまう。

しかし、乾いたナプキンで拭いても眼鏡のべたべたは取れず、ライカは段々涙目になっていく。

「と、とれやせん……わぁあどうしよう、べ、弁償しやすー！」

「ライカさん落ち着いてください、濡れた布巾などで拭けば落ちますので。一旦座ってください……！」

結局、店員から濡れ布巾を借りて、ライカが塗りひろげてしまったクリームを拭き、その後眼鏡拭きでレンズを拭き上げてようやくカンナの眼鏡はきれいになった。

それを見てようやくライカは落ち着きを取り戻すのだった。